

次回も不登校・思春期のメンタルケアをテーマにした講演会を予定しています。

〔講師〕

★読売新聞「医療ルネサンス」記事掲載等、多数ご活躍されています。

関谷 秀子 医師

(法政大学現代福祉学部教授)

【経歴】

児童青年精神医学、精神分析学が専門。
医学博士、前関東中央病院精神科部長
法政大学現代福祉学部教授
初台クリニック勤務

【資格】

精神保健指定医
日本医師会認定産業医
日本精神神経学会精神科専門医・指導医
日本児童青年精神医学会認定医
子どものこころ専門医
日本精神分析学会認定精神療法医・スーパーバイザー

7/22(日)

10:00-13:00

場所：きしろメンタルクリニック待合室

【医療ルネサンス】子どもを守る 育む心<4>思春期に健康な親離れ

2018年4月3日 5時0分

「お前なんか頼じゃない」

高校生の長女が毎日のように、東京都内の自宅で母親(44)に暴言を浴びせる。母親はそれに耐えながら、長女の言うことを聞いてやる構図ができていた。

初台クリニック(東京都渋谷区)の診察室。母親は精神科医の関谷秀子さんに、遠慮がちに口を開いた。「長女にアイスを買ってきてと言われたので、今回は自分で行くように言ったら、また荒れてしまって」



長女の拒食症や暴言について、関谷さんに話をとる母親にアドバイスする関谷さん(東京都渋谷区初台クリニック)

長女は小学校高学年の時、男子から「太っている」と言われたのをきっかけに、心理的な要因から体重の増加を恐れて食事をとらなくなる拒食症になった。別のクリニックで短時間の診察を数回受け、関谷さんが当時勤務していた病院に紹介された。紹介状には、生まれつきの脳機能障害である「発達障害」とあった。

関谷さんによって発達障害は否定されたが、拒食症には今も悩む。中学では友人関係がうまくいかず不登校になった。家にずっといる長女は次第に母親にわがままを繰り返し、母は応じることで娘を救い出せるのではと誤解。2人の密着した関係ができた。

自分でアイスを買に行こうと言った母親の対応を、関谷さんは「それでいい。親離れを進めるためにも良い対応です」と認めた。

思春期になると、健康なら親離れが始まる。小学生のうちは親に悩みを相談するが、相談相手が友人に変わり、親密な友人関係を作る。友人の考え方など、親以外の価値観を知るうち、自分自身の価値観を持つようになる。

もし親離れが進まない、小学校の頃と同様に親にだけ頼り、親密な友人関係に発展しない。親子関係は幼児期のようになり、時に暴言を吐いたり暴力をふるったりするようになる。

さらに、子どもに表れている発達の問題は、対症療法では解決しないことも多い。乳児期に母親への信頼感を育み、3歳頃コイトレニングによって社会的ルールを学ぶなど、発達段階に応じた課題がある。

「発達の過程では誰も積み残しがあり、完璧な人はいない。問題が見つかったら、積み残した部分にアプローチすることが大事」と関谷さん。例えば、このケースのように親が子どもの親離れを阻んで過干渉な場合は、親、子それぞれに、子どもが自分で考えて行動できるように勤めるなどして治療する。

近年、この長女のようによく調べられないまま、発達障害とされるケースが増えている。関谷さんは「子どもの健やかな成長を促すには、症状のみに注目するのではなく、子どもがどのような発達課題を乗り越えられていないか、よく見極めていくことが大切だ」と指摘する。

個別相談会も同時開催！

きしろ心理相談室の臨床心理士が、ご本人や保護者の方の
様々なご相談に対応いたします。

【お申込み】きしろ心理相談室 講演会事務局

TEL: 090-2226-1072 受付時間: 10:00~17:00(土日祝不可)